

生成AI PoC ホワイトペーパー

小さく試し、早く判断するための実践ガイド



目次

1. はじめに：なぜ今、生成AI PoCが必要なのか

- 1-1. 生成AI導入で企業が直面している課題
- 1-2. いきなり本開発ではなく、PoCから始めるべき理由
- 1-3. 「AI時代のMVP」という考え方
- 1-4. 本資料でわかること

2. 生成AI PoCとは何か

- 2-1. PoCとは「作る前に確かめる」活動
- 2-2. 通常のシステム開発と生成AI PoCの違い
- 2-3. 生成AI PoCで検証すべき3つの観点
- 2-4. PoCで終わるプロジェクトと、事業化につながるプロジェクトの違い

3. 失敗しやすい生成AI PoCのパターン

- 3-1. 目的が「AIを使うこと」になっている
- 3-2. 評価指標が決まっていない
- 3-3. 現場業務との接続が弱い
- 3-4. デモは動くが、実運用に耐えない
- 3-5. セキュリティ・権限・データ管理を後回しにしている
- 3-6. 本開発に進む判断基準がない

4. 成果につながる生成AI PoCの設計

- 4-1. PoCの前に決めるべきこと
- 4-2. PoCテーマの選び方
- 4-3. 小さく始めるためのMVP設計
- 4-4. 最初から作り込みすぎない理由
- 4-5. 2週間～1か月で検証する場合の進め方

5. 生成AI PoCの進め方：5ステップ

- 5-1. Step 1. 課題整理
- 5-2. Step 2. ユースケース設計
- 5-3. Step 3. プロトタイプ開発
- 5-4. Step 4. 業務データで検証
- 5-5. Step 5. Next Stepの策定

6. 生成AI PoCでよくあるユースケース

- 6-1. 社内ナレッジ検索・FAQ
- 6-2. 文書作成・要約・チェック
- 6-3. 営業資料・提案書作成支援
- 6-4. PDF・画像・動画など非構造データの解析
- 6-5. 教材・学習支援
- 6-6. 業務システムへのAI機能追加

7. 生成AI時代のPoC技術構成

- 7-1. PoC開発にも生成AIをフル活用する
- 7-2. まずは既存AIツールで検証する
- 7-3. 必要最小限のプロトタイプとMVPの違い
- 7-4. PoCの技術構成は3段階で考える
- 7-5. 最小構成で作りと、評価ログを残す
- 7-6. 本開発を見据えた設計の注意点

8. PoC後に見るべき評価指標

- 8-1. 精度
- 8-2. 業務削減時間
- 8-3. 利用者の満足度
- 8-4. 導入・運用コスト
- 8-5. 本開発に進める条件
- 8-6. 撤退・保留すべき条件
- 8-7. 評価のためのチェックリスト

9. 事例：生成AI PoCの進め方

- 9-1. 事例：コンテンツ・メディア領域のAI活用
- 9-2. 事例：教育・学習支援のAIプロトタイプ
- 9-3. 事例：専門領域におけるAI検証
- 9-4. 3つの事例に共通する設計上の特徴
- 9-5. 自社の検討に当てはめるには

10. wildcardの支援範囲

- 10-1. wildcardのPoC支援の考え方
- 10-2. 5ステップにおける支援範囲
- 10-3. wildcardの強み
- 10-4. 関わり方のパターン
- 10-5. これまでの取り組み領域
- 10-6. 相談から開始までの流れ

11. 生成AI PoCを始める前のチェックリスト

- 11-1. 自社で整理すべき情報
- 11-2. 相談前に準備するとよい資料
- 11-3. PoCテーマを選ぶための判断軸
- 11-4. まず2週間で検証できること

12. 生成AI PoCは小さく始め、早く判断する

- 12-1. PoCの目的は、正しく次に進むこと
- 12-2. MVP的に作ることで失敗コストを下げる
- 12-3. まずは小さな業務課題から始める
- 12-4. 生成AI PoCのご相談



CHAPTER 1

はじめに：なぜ 今、生成AI PoCが 必要なのか

いきなり本開発ではなく、まずPoCで確かめる。

生成AIへの注目が高まり、多くの企業が「自社でも何かしなければ」と感じています。一方で、実際に検討を始めてみると「何から手をつければよいかわからない」「業務に本当に使えるのか確証が持てない」という壁にぶつかり、検討が止まってしまうケースが少なくありません。

本章では、生成AIに取り組む企業がいま直面している課題を整理したうえで、なぜいきなり本開発ではなくPoC(Proof of Concept、概念実証)から始めるべきなのか、そしてPoCをどう位置づけるとよいのかを説明します。

1-1. 生成AI導入で企業が直面している課題

ChatGPTやClaudeに代表される生成AIの登場以降、業務活用への関心は急速に広がりました。経営層からは「自社ではどう取り組むのか」という問いが投げかけられ、現場では「何かに使えそうだが、何に使うべきかが見えない」という状態が続いています。

実際に企業の担当者と話をしていると、検討が前に進まない理由には共通したパターンがあります。

- どの業務に適用すれば成果が出るのか判断できない
- 自社のデータで本当に動くのか、試してみるまでわからない
- 期間・予算の感覚が持てず、社内で稟議が通せない
- セキュリティ・情報管理・権限の整理が追いつかない
- 既存業務やシステムとの接続点が見えない
- 一度試したが「面白いが業務には使えない」で止まっている



これらは個別の技術的な問題というよりも、「生成AIをどう評価し、どこまで作れば判断できるのか」というプロセス上の課題です。従来のシステム導入の進め方をそのまま当てはめると、生成AIのプロジェクトは止まりやすくなります。

その結果、関心はあるけれども着手できない企業と、試したものの実装に進めずに終わる企業が増えています。生成AIの活用において重要なのは、「使うかどうか」ではなく、「自社の業務で意味のある形で使えるかを、どう確かめるか」です。

1-2. いきなり本開発ではなく、PoCから始めるべき理由

生成AIを使ったシステムは、従来の業務システム開発とは性質が異なります。最も大きな違いは、**入出力が決定論的ではない**という点です。

従来のシステムであれば、要件を定義し、仕様を確定させてから開発を進めるという流れが成り立ちます。同じ入力に対して同じ出力が返ることが前提だからです。一方、生成AIは確率的に動作し、同じ入力に対しても出力が揺れます。プロンプトの設計、参照させるデータ、利用するモデルによって、業務適合性は大きく変わります。

そのため、生成AIを業務に組み込む際には、次のことが事前にはわかりません。

- 想定した業務で十分な精度が出るか
- 利用者が実際に使い続けたいと感じるか
- 業務フローのどこに組み込むのが現実的か
- 運用・セキュリティ・コストが許容範囲に収まるか

これらは、机上検討やベンダー資料だけでは判断できません。**実際に作って、実際の業務データで動かしてみ、初めて見えてくる**ものです。

しかし、いきなり本開発に進めば、数千万円規模の投資をしてから「業務には合わなかった」と判明するリスクがあります。逆に、社内検討だけが続けていても、結論は出ません。

ここに、PoC(概念実証)の役割があります。PoCは、本開発に進む前に、**技術的な実現可能性・業務上の効果・運用への接続可能性を、小さな投資で確かめるための活動**です。「作ること」自体が目的ではなく、「本開発に進めるかを判断するための材料を得ること」が目的です。



この区別が、後の章で扱う失敗パターン・成功パターンを分ける起点になります。

1-3. 「AI時代のMVP」という考え方

PoCを進めるうえで参考になるのが、スタートアップで広く用いられてきたMVP(Minimum Viable Product、実用最小限の製品)の考え方です。

従来のMVPは、コアとなる機能だけを最小構成で実装し、市場に出して反応を見るという発想でした。「全部作ってから出す」のではなく、「価値の核を最短で検証する」ためのものです。

生成AI時代には、この考え方がさらに加速します。理由は3つあります。

第一に、**既存の生成AIツールやAgentを活用すれば、ゼロから作らなくても多くの検証が可能**になっている点です。ChatGPT、Claude、各種AIエージェントツール、ノーコード型のAIプラットフォームを組み合わせれば、数日～数週間で動くものが用意できます。

第二に、**生成AIは「作り込んでから評価する」よりも「早く動かして評価する」方が向いている**点です。プロンプトやデータ、ワークフローを試行錯誤しながら調整していく性質があるため、完成度を上げる前に検証ループを回した方が結果が早く出ます。

第三に、**業務適合性は実データを通してしか見えない**点です。サンプルデータでうまく動いても、現場のデータで同じ精度が出るとは限りません。早い段階で実データに触れることが、判断の質を決めます。

本資料では、こうした考え方を「AI時代のMVP」と呼びます。完成度を高めることが目的ではなく、**業務に組み込めるかを最短で確かめるための試作**として、PoCを設計します。



要点を一言で表せば、「小さく作って、早く判断する」です。

1-4. 本資料でわかること

本資料は、生成AIの活用を検討している企業担当者を対象に、PoCの考え方と進め方を整理したものです。次のような方を想定しています。

- 生成AIの業務活用を検討しているが、何から始めればよいか整理したい方
- 社内でのPoCの企画を立てるにあたり、進め方や評価方法を確認したい方
- 過去にPoCを実施したが、本開発につながらず、原因を整理したい方
- DX推進、新規事業、情報システム、経営企画など、AI活用の旗振り役を担う方

本資料を読み終えたあと、次のことが理解できる構成になっています。

- 生成AI PoCとは何か、通常のシステム開発とどう違うのか
- 失敗しやすいPoCのパターンと、その回避方法
- 成果につながるPoCの設計条件
- 企画から評価までの5ステップ
- よくあるユースケースと技術構成の考え方
- PoC後に見るべき評価指標と、本開発に進む判断軸
- 自社でPoCを始める前に整理しておくべきこと

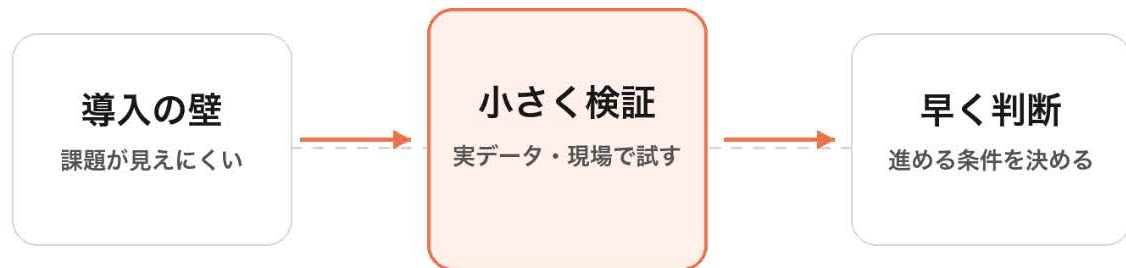


生成AIは、可能性の大きい技術である一方で、すべての業務に当てはまる万能のツールではありません。重要なのは、**自社の業務にとって意味のある使い方を、小さく早く確かめる**ことです。

次章以降では、その具体的な考え方と進め方を順を追って説明します。

生成AI PoCの入口

共通点：作る前に確かめる



業務に使えるかを、小さく早く見極める

なぜ今PoCから始めるのか

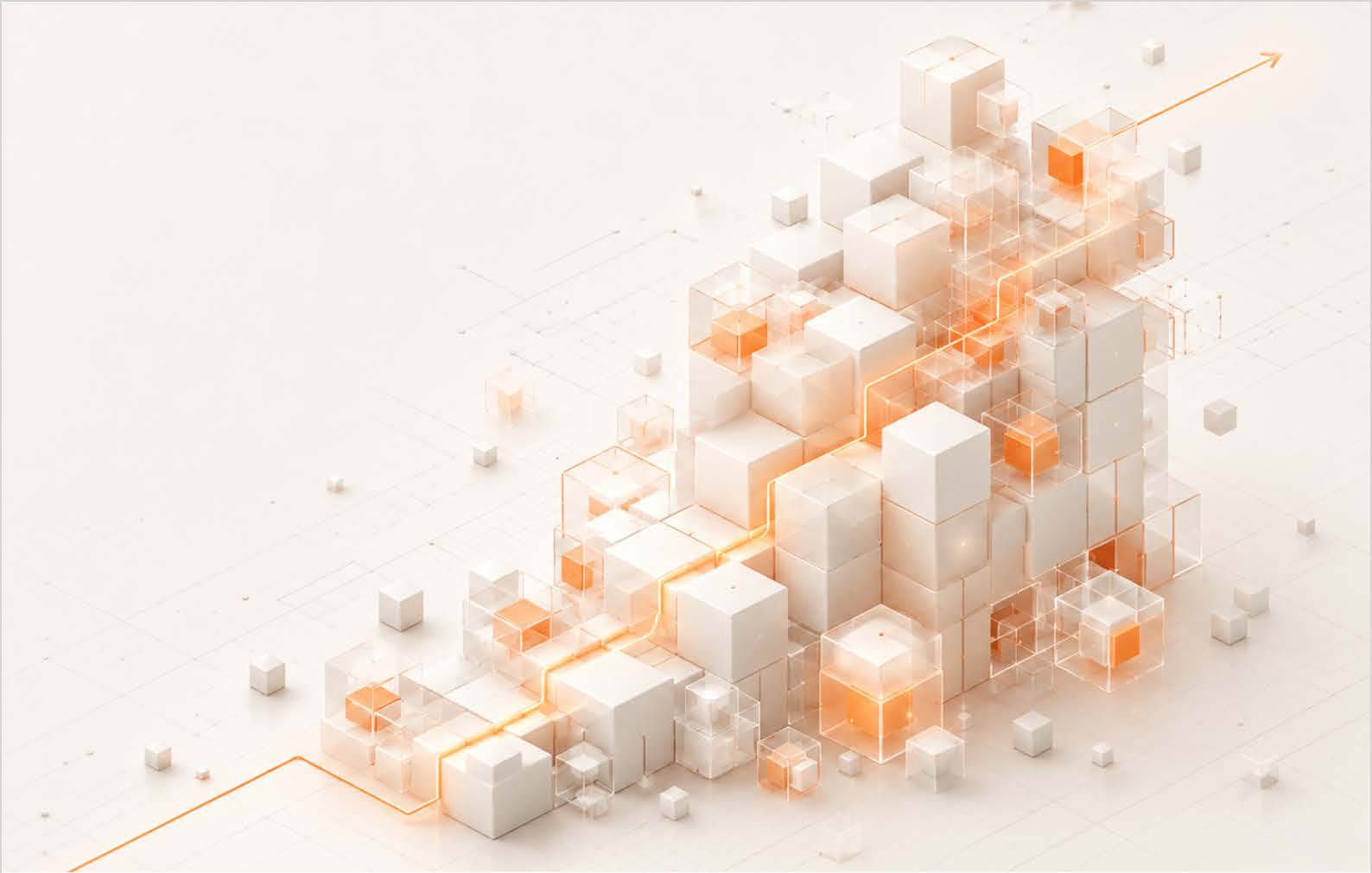
生成AIの導入は、関心の高さに比べて検討が止まりやすい領域です。技術トレンドだけで意思決定を進めると、要件も評価軸も定まらないまま投資が膨らみます。PoCは、本開発に踏み込む前に業務適用の現実味を確かめ、関係者の判断を揃えるための入口として機能します。

- 業務に持ち込んだときの導入の壁を、机上ではなく検証の中で早期に発見する
- 不確実性の高い領域を小さく区切って試し、論点を絞りながら検討を前進させる
- 次に進むか止めるかを決められる条件を、開始前に言語化して合意しておく

PoCを投資判断の前段に据える

PoCは単発の試作ではなく、本開発・追加検証・撤退のいずれを選ぶかを定めるための材料づくりです。技術検証から入るのではなく、解きたい業務課題と意思決定の論点を起点に置くことで、検証の輪郭が定まり、結果も判断に直結します。

- 技術ではなく業務課題から発想し、誰のどの作業を変えるのかを明確にしてから着手する
- 完成度を追わず、現場で使える最小構成で試し、実務反応を一次情報として集める
- 検証の終わりに「進む・直す・止める」のどれを選ぶかを、根拠付きで決められる状態を作る



CHAPTER 12

まとめ：生成AI PoCは小さく始め、 早く判断する

小さく試し、早く判断し、学びを積み上げる。

ここまで、生成AI PoCの考え方、起こりやすい失敗、成果につながる設計、5ステップの進め方、ユースケース、技術構成、評価指標、事例、そして自社で始めるための準備までを順に見てきました。

本章では、全体を貫いてきた基本的な考え方を改めて整理します。新しい論点を加えるのではなく、生成AI PoCに取り組むうえで最後まで持ち続けていただきたい3つの視点を、簡潔に振り返ります。最後に、自社でPoCを進めるにあたっての相談先として、wildcardのご案内を記載しています。

12-1. PoCの目的は、正しく次に進むこと

本資料を通してお伝えしてきた最も重要な点は、**PoCは「作**
るための活動」ではなく、「次の意思決定を行うための活動
であるということです。

生成AIは、机上検討やベンダー資料だけでは、自社の業務に
組み込めるかどうかを判断できません。実データを使い、実
際の利用者に触れてもらい、業務フローに当てはめてみて、
初めて見えてくる情報があります。PoCは、その一次情報
を、本開発に進む前の小さな投資で得るためのプロセスで
す。

このとき重要なのは、PoCの結果を「成功か失敗か」の二項
対立で評価しないことです。確認すべきは、技術成立性、業
務効果、運用可能性の3つの観点で、それぞれが**どの程度確**
からしいかです。3つすべてが揃えば本開発、一部に課題が
残れば追加検証や対象業務の変更、運用面で見通しが立たな
ければ保留、業務効果が小さければ撤退——これらの判断の
いずれもが、PoCの正当な成果です。

特に、撤退や保留は「失敗」ではありません。本開発に進め
ば数千万円規模の投資になり得るプロジェクトを、PoCの段
階で見直せたのであれば、それは投資判断として価値のある
結論です。生成AI PoCの目的は、きれいなデモを作ること
ではなく、**根拠を持って次に進むこと、根拠を持って立ち止ま**
ることにあります。



12-2. MVP的に作ることで失敗コストを下げる

生成AIプロジェクトが止まる最大の理由は、技術の難しさで
はなく、**最初に作り込みすぎることによる失敗コストの高さ**
にあります。

本開発に近い品質でPoCを設計すれば、検証に入る前に時間
と費用の多くが使われます。そのうえで業務適合性が見えな
かった場合、関係者は「ここまで作ったのだから、何とか活
かしたい」と考え、判断が後ろ倒しになります。判断の機会
を失ったPoCは、ずるずると続く小規模開発に変質してい
きます。

これを防ぐのが、MVP的な設計思想です。検証したい問いを
絞り込み、その問いに答えるために必要な要素だけを最小構
成で実装する。ゼロから作らず、既存の生成AIツールや
Agent、ノーコード型のプラットフォームを組み合わせる。
完成度よりも、**判断に必要な情報が得られる品質**を目指す。
これらが揃えば、PoCの所要期間は2週間～1か月の単位に収
まり、結果が想定と違って軌道修正のコストは小さく抑え
られます。

「小さく作る」は、手を抜くことではありません。**何を作ら**
ないかを意識的に決め、検証と判断にリソースを集中させる
ための設計判断です。生成AIのように仮説が動きやすい領域
では、この設計が、最終的に到達できる成果の高さを決ま
す。



12-3. まずは小さな業務課題から始める

最後に、これからPoCに着手される方への、最も実践的な助
言です。

社内には、「生成AIで何かできないか」というテーマが複数あ
るはずですが、その中で最初に着手すべきは、**最も派手なテ**
ーマでも、最も大きなテーマでもなく、最も検証しやすい業務
課題です。

具体的には、次のような条件を満たすテーマから選びます。

- ・ 現場で実際に時間がかかっている、または品質がばらついている業務がある
- ・ その業務の担当者が、PoCに協力してくれる体制がある
- ・ 検証に使えるデータが、すでに社内にある(あるいは短期間で揃う)
- ・ 出力を人が確認するワンクッションを置ける、可逆性の高い領域である
- ・ 改善できれば、効果を概算で語れる



すべての条件が揃っている必要はありません。重要なのは、「**大きな構想を、最も重要な仮説に分解する**」という発想です。一度のPoCで全社展開や事業化までを描こうとせず、まずは「この業務で、この利用者にとって、生成AIが価値を出せるか」という最小の問いに答える。そこで得た判断材料をもとに、次のPoCや本開発で範囲を広げていく方が、結果として早く事業化に近づきます。

最初の一步を踏み出すために必要なのは、生成AIの最新動向を網羅することでも、完璧な企画書を用意することでもありません。**自社のどの業務が、どの程度大変で、誰がそれを担っているか**を、A4で1〜2枚にまとめてみる。それだけで、PoCの議論は具体的に動き始めます。

12-4. 生成AI PoCのご相談

wildcardでは、生成AI PoCのテーマ設計から、プロトタイプ開発、業務データでの検証、Next Stepの策定までを、一貫してご支援しています。

これまで、メディア・自動車・ヘルスケア・教育など、業界特有の制約があるなかでの生成AI活用を支援してきました。汎用的なフレームワークではなく、**自社の業務に合わせて、2週間〜1か月で検証可能なPoCテーマをご提案すること**を基本にしています。

次のような状況であれば、初回のご相談は無料で承っています。

- ・ 生成AIの活用を検討したいが、自社のどの業務から始めればよいか整理したい
- ・ 社内でPoCの企画は動き始めているが、進め方や評価方法に不安がある
- ・ 過去にPoCを実施したが、本開発につながらず、原因を整理したい
- ・ 業務責任者・情報システム部門・経営層の判断軸を揃えるための整理を進めたい

ご相談の段階では、貴社の業務内容や検討状況をお伺いしたうえで、PoCテーマの候補、想定される検証範囲、概算の期間と進め方をご提示します。その場で契約を前提とするものではなく、**社内で検討を進めるための材料**としてお使いいただける形でお渡しします。



生成AIは、すべての業務に当てはまる万能のツールではありません。ただし、自社の業務にとって意味のある使い方を、小さく早く確かめる手段は、いまや十分に揃っています。その最初の一步を踏み出す場として、PoCをご活用ください。

おわりに

本資料を通じて繰り返しお伝えしてきたのは、次の一文に集約されます。

“生成AI PoCは、小さく試し、早く判断するための活動である。”



作ることが目的ではなく、判断することが目的です。完成度を高めることが目的ではなく、次に進むかを決めることが目的です。成功させることが目的ではなく、正しく次の一手を選ぶことが目的です。

この視点を持って取り組むPoCは、結果がどうであれ、貴社にとっての投資判断材料として機能します。本資料が、その第一歩を踏み出すための一助となれば幸いです。



小さく作り、早く試し、精度を上げる

生成AI PoCの基本は、対象を絞って小さく作り、短いサイクルで早く試すことに尽きます。技術が動くか否かではなく、投資を続けるべきかを判断する精度を上げることが目的です。大きく作る前に、現場と実データに早く触れること自体が、本開発の成否を左右します。

- 検証範囲をMVPに絞り、機能網羅ではなく論点検証に必要な最小限の構成だけを作る
- 実データ・実ユーザーで確かめ、デモの完成度ではなく業務で使える形に近づける
- 検証は短い周期で回し、観察・修正・合意形成を同じテンポで進める
- 数値と一次情報を記録し、次フェーズの議論で再現可能な状態に残す

「冷静に決める」を最後まで貫く

PoCの目的は、成功を演出することではなく、次に進むべきかを冷静に決めることです。良い結果が出るほど判断を緩めたくなり、悪い結果が出るほど判断を先送りしたくなる力学が働きます。だからこそ、開始前に決めた条件と実測を突き合わせて、Go・No Go・保留のいずれかに着地させる規律が必要です。

- 条件が揃ったテーマはGoとして、本開発の規模・期間・体制まで具体化する
- 条件を満たさないテーマはNo Goを選び、撤退を失敗ではなく合理的判断として扱う
- 即断できない場合は保留条件を明文化し、何が満たされれば再開するのかを残す
- いずれの判断でも、次の投資の対象・期間・期待リターンを言語化して関係者と共有する

NEXT STEP

小さく試し、早く学び、 未来の事業を積み上げる

1つ1つのPoCは、小さな石かもしれません。

しかし、それを積み重ねた先に、
新しい事業のかたちが見えてきます。

